

タイトル	Jhumpa Lahiri のイタリア語による言語実験と創作への影響
著者	渡部, あさみ; WATANABE, Asami
引用	北海学園大学人文論集(68): 191-225
発行日	2020-03-31

Jhumpa Lahiri のイタリア語による 言語実験と創作への影響

渡 部 あさみ

1. はじめに

現代アメリカ女性作家 Jhumpa Lahiri が、近年イタリア語で創作活動を行っていることが注目されている。Lahiri は 2015 年に自伝的作品である *In Altre Parole* (以下 *In Other Words*)、同年に本に関するエッセイ *Il Vestito dei Libri* (*The Clothing of the Books*)、そして、2018 年に長編小説となる *Dove Mi Trovo* (*Where I Find Myself*) の三作をイタリア語で出版した。¹

Lahiri はインド系アメリカ人で 2 歳の時に両親とアメリカに移住し、家庭ではベンガル語を話し、学校では英語で教育を受けてきた。Lahiri にはイタリア語を学ぶ客観的な必然性はなかったが、1994 年に初めてイタリアのフィレンツェに旅行をした学生時代に独学でイタリア語の勉強を始めた。² その後、約 20 年を経て 2012 年の夏から約 3 年間、ローマに家族で長期滞在をした。2015 年にプリンストン大学で教鞭を取るためにアメリカに戻り、現在はイタリアとアメリカの両国に拠点を持ち、生活をしている。

In Other Words (2016) は、彼女と言語との関係を中心に書いたイタリア語による自伝的エッセイである。作者が、“meditative book”と呼んだように英語、ベンガル語、イタリア語について、そしてそれらの言語とアイデンティティとの関係が瞑想的に探求されている。³ また、イタリア語で書くことはそれまでとは異なる「文学的進路」(107)を与え、イタリア語は英語やベンガル語と同様に、彼女のアイデンティティの一部になっているという。最新作のイタリア語長編である *Dove Mi Trovo* (2018) では内省

的な物語の主人公は匿名性を持ち、抽象的な存在である。これまでの作品とは違い、過去と現在に関わり、特定の時間や場所は示されず、日常生活や両親との関係に焦点が当てられている。その中で、ディアスポラの「孤独」(solitude)を肯定的に受け入れて生きること、時間と空間からの解放、そして、変化の重要性が強調されている。

本論では、近年のインタビューと *In Other Words* を中心に、作者の実験的な試みとしてのイタリア語による創作活動の動機と背景を探り、言語とアイデンティティとの関係および創作への影響について検討する。イタリア語の創作は、日記のように自己との対話と思考の場となり、作者の自己表象を可能にした。言語との関係により構築された「不完全な」(imperfect)アイデンティティは、創造の原動力となり、完全な変化を表す「変身」(metamorphosis)をイメージし、変化を重視した創作活動を目指すことにつながったことを検証する。また、Lahiri からみた翻訳の意味と役割、近年作品における普遍的なディアスポラ主体の表象とグローバリティに注目し、社会言語学的な観点から分析と考察を行う。

2. Lahiri の創作とイタリア語：言語とアイデンティティへの社会言語学的アプローチ

社会言語学は言語と社会の関係を扱い、その言語の社会的機能や意味を解明する。人々が異なる社会的文脈により異なる言語の使い方をすることは、言語機能と共同体の社会的関係について、そして、なぜ人々が言語を通してアイデンティティを構築するのかについて多くの情報を与えている(Holmes and Wilson 1)。アイデンティティは社会言語学の中心的概念であり、言語は社会と個人の世界を結びつけ、現代のグローバルな社会と環境において、多くの人々が複数のアイデンティティを、言語的な関わりを通じて構築している(Holmes and Wilson 246)。

Maria Lauret は、*Wanderwords: Language Migration in American Literature* (2014) において、グローバルな英語帝国主義は矛盾を孕み、英

語で創作をする作家は増えているが、より多くの作家が自身の文化の表象に複数の言語を用いる動向について指摘した。英語はダイナミックで多文化を背景とする移民文学に適応し、別の言語文化に属する作家たちは国境を越えてグローバルな関係を構築しており、多言語での創作は将来の世界文学の顕著な特徴の一つとなる。しかし、過去数十年のグローバルな移動がもたらす経済、文化、社会、政治の変動の影響については検討されてきたが、このような移動による言語シフトは個人のアイデンティティの構築に大きな影響を与えると認識されているのにも関わらず、十分に検討されていない（Lauret 6）。社会言語学的観点から言えば、言語を巡る変化には常に動機があり、アイデンティティを考察する上で深い意味を持つため、重要視されるべきである。このような作品はイデオロギー的示唆を含み、アメリカ文学に文化的差異を取り込むことで、英語のヘゲモニーに抵抗する。多言語による創作は英語以外の言語の歴史を回復し、国境を越えたディアスポラを 21 世紀のアメリカ文学に結びつけていくという（Lauret 4）。

Ketu H. Katrak は *The Politics of the Female Body: Postcolonial Women Writers of the Third World* の中で、第三世界の女性作家作品の脱植民地化のプロセスにおける身体の戦略的な利用を検証した。また、文化的帝国主義を批判し、ポストコロニアルな女性の文学的伝統が、性差による不平等と支配に抵抗し、社会変動に向けて想像的で戦略的な努力により連帯を実現し、文化と政治の再定義に影響を与えたと主張している（Katrak 1-3）。言語経験も身体的な経験として、作家たちは創作により文化帝国主義に対抗し、現代アメリカ文学の歴史を越境的なアイデンティティの表象により相対化し、脱中心化しているといえるだろう。

Antara Chartterjee は Lahiri のポストコロニアルな物語の変化と発展、その意味について説明した。初期の Lahiri のフィクションは、主に一世および二世のアメリカにおけるベンガル・ディアスポラの経験を描くものであった。その後、グローバル資本による大量移民の時代に、身体と感情の疎外が、かつてないほど広く人々の置かれた状況となるにつれ、Lahiri は現代アメリカだけではなく、ディアスポラの苦境やアイデンティティの間

題について語るようになった (Chatterjee 97)。そのため、長編小説 *Unaccustomed Earth* (2008) では、ベンガル・ディアスポラの文化的アイデンティティの探求は、従来作品とは異なるものとなった。全員がベンガル人であるが、関心事は移り変わり、初期の短編作品から次第にジャンルの枠を広げて移民の物語へと変化した。ベンガル性は抑制され、感知しにくくなったが、ベンガル性と関係する文化的適応の歴史は、登場人物の人生に特異な複雑性をもたらすサブテキストとして機能している (Chatterjee 108)。Lahiri の作品は、*The Location of Culture* における Homi Bhaba の理論による「異種混淆性」(hybridity)、「中間性」(in-betweenness) と「第三の場所」(third place) の可能性を提示し続けている。Lahiri はディアスポラ・コミュニティの存在する場所において、ハイブリッドな相互作用関係により異なる文化の交渉と再構成を可能にし、ディアスポラを希望と新しい出発の場所として描いた。このような文化間、国家間の結びつきにより、ディアスポラの「場」は、可能性に満ちた場所となっている (Chatterjee 102)。

Sima Farshid は、Lahiri が移民が直面する問題について描くことを通して、“home” (故郷) および “motherland” (母国) に対する伝統的な定義に相対し、ハイブリッド・アイデンティティのあいまいさや柔軟性を表現することに価値を置いていると述べた(1)。作者はディアスポラからみた「第三の場所」の豊かさと利益を、厳格な母国の慣習を捨てて冒険に挑み、異なる環境と社会において、その機会を活用する登場人物を率先して中心に描くことを通して前景化させている。ハイブリッドなアイデンティティを持つ人々に対する新しい問題提起は、ディアスポラの文化に関する新しい理解と移民や社会運動に対する肯定的な視点を与える結果となった。作者は問題を描くと同時に、ディアスポラの環境にあることを肯定的に捉え、機会を活用することにより、移民の間により良い関係性が生じることを示唆する (Farshid 1-4)。それは、*Unaccustomed Earth* (2008) のグローバルに生きる登場人物の才能が発揮される経験や「目覚め」の瞬間が訪れる様子が描かれることに現れている。このように移民生活の異なる側面を提示

し、その多面性を明らかにすることで Lahiri は「中間性」(in-betweenness) についても異なるイメージを付与する (Farshid 4)。これらは英語作品の分析と考察であるが、Lahiri の描く主体はイタリア語作品に受け継がれ、さらに進化している。

Esterino Adami は、Lahiri の複数の言語と文化を移動する「言語横断」(translingualism) の実践から、複数のアイデンティティが顕現するハイブリッドなテキストを生み出したと説明している (86)。近年のグローバリゼーションは、コミュニケーションの形態としての「言語横断」を顕在化させた。さまざまな文化、経済、社会において人々の国境を越えた接触は、言語の異なるグループによる関わりを増大させた。移動は言語を新しい土地へと運び、その使用範囲を拡大させ、テクノロジーの発展は境界を越えた言語コミュニケーションを促進した。このようにして、人々はクリエイティブな戦略を用いて、新しいコミュニケーションのスタイルを生み、自身の「声」を表現するようになった (Canagarajah 2)。

そのため、現代社会においては、出生地、言語、エスニシティを超越したアイデンティティを得ることができるようになり、アイデンティティはパフォーマティブなものであるとの認識を前提とし、言語は状況に適応して戦略的なものになってきている。このような背景により、現代の多層化された主体から優勢な言説に抵抗し、連帯するためにアイデンティティを形成することも可能となった。Gayatri C. Spivak の「戦略的本質主義」(Strategic Essentialism) から着想を得た「戦略的構築主義」(Strategic Constructivism) においては、個人の関心と目的から言語との関係で構築されたアイデンティティについて説明している (Canagarajah 198-201)。つまり、言語を選択し、その言語文化に基づくアイデンティティを構築することもできるということであり、Lahiri はこの「戦略的構築主義」を実践していると解釈できる。

このような観点から、Adami は Lahiri の言語横断 (translingualism) の実践は、単に翻訳や他言語の利用ではなく、融合、同化、新しい慣習とスタイルの産出の動きと位置づけた (Adami 86)。彼女の人生の経験を物語

として織り上げていく過程において、エピソードや出来事に創作が加えられている。そして、Lahiriは彼女自身が複数の言語と関わった歴史を反映し、厳格な境界を壊し、新しい言語を用いることにより、最終的に複雑な内面について理解を得ていく (Adami 95)。

Silvia Lutzoni は、家族とローマへ移住し、英語を捨てイタリア語で創作するという Lahiri の選択は、疎外や離別によるものではなく、アイデンティティ探求の必然的な到達点であると述べた (Lutzoni 108)。イタリア語は、初めて Lahiri 個人の経験に基づく作品を描くことを可能にした。*In Other Words* は自伝的かつ小説のような作品であり、その中でイタリア語は重要な役割を果たし、言語はツールだけではなく、主題となっていることがわかる。彼女は博士課程大学院生であった 1994 年に妹とフィレンツェを初めて訪ね、その後の人生でローマが自分の「居場所」であると感じた。その場所で、アメリカとインドとの狭間で悩んでいたそれまでの人生とは異なり、自分自身を受け入れられると初めて感じたという。本作における Lahiri の「複層的アイデンティティ」(multi-layered identity) は、「第三の場所」を求めたポストコロニアルなアイデンティティ探求から描出されたものであると説明した (Lutzoni 114-17)。

Lahiri は英語作品の中でも、物語とベンガル系ディアスポラの登場人物たちを変化させ、発展させてきたが、イタリア語の小説ではさらに主体を拡大している。最新作 *Dove Mi Trovo* (2018) の物語では、ベンガル系アメリカ人から普遍的なディアスポラの主体意識を描く方向に変化し、他者との関係性とともに個人の内面と場所とのつながりに焦点を置き、新しい特徴が見られる作品となっている。上述のように、イタリア語で書かれた作品には創作スタイルの変化と発展が見られるが、*In Other Words* の研究はまだ少なく、また、*Dove Mi Trovo* の英語翻訳は未完であり、本作に言及している文献は、まだほとんど出されていない。そのため、*Dove Mi Trovo* に続くイタリア語による創作の動機と背景、そして、その影響について近年行われたインタビューと合わせ、*In Other Words* を中心に検証を行う。

3. 言語と創作：2016 年から現在までのインタビュー

In Other Words を出版した際の 2016 年のインタビュー（“Jhumpa Lahiri Finds Freedom In Italian Memoir: ‘No One Expected Me To Do It’”）において、Lahiri はイタリア語の「メモワール」を書くことにより、人々からの期待という重圧から解放され、「自由」を得たと語っている。Lahiri は、イタリア語で創作を行う動機として、作家としての自身を「解体」し、「再構築」することにより、新しく創造することの必要性を感じていたことを挙げた。それは、たとえ一つの言語で書こうとも常に作家が取り組んでいることであり、創造的衝動であるという。これまで彼女が作家として得た評価や読者の存在は、作品の価値を実感させる一方で、多大な期待を集めることでもあった。そのため、期待のプレッシャーから逃れる方法としてイタリア語を利用し、他の作家や芸術家と同様に、純粹に思考し、表現する自由を持ちたいと考えた。Lahiri の人生は自身や他の人々の期待に応えることの連続であり、イタリア語の魅力は誰も Lahiri がイタリア語に取り組むとは思っておらず、期待もしていないことであったと話した（I'm a person who has never known life without answering to expectations from others — from myself most of all — and I think what is so attractive to me about this path in Italian is that no one expected me to do it）。

この新しい言語による創作では、作者は初めて自由な表現が可能となる体験を得られ、計画とプロセスの全てが作者の選択によるものであることが重要な意味を持つと考えている。また、なぜアメリカ作家としての成功に満足せず、困難を承知して新しい挑戦を行うのかという質問に対して、作者は次のように答えている。

Well, I've always been searching to arrive at a certain voice that will probably elude me forever; in fact, it will. So it's the search for that voice, that for me, drives the whole thing forward. I wrote my first book and I thought, “Well, OK, how can I express myself more clearly

in a way that's more true and more satisfying?" So then I write another, and then I write another, and then I write another, and I don't feel any satisfaction in the end.

Lahiri は常に唯一の「声」(voice)を探し当てることを目指しており、その目標を原動力としてきた。しかし、最初の作品を書き終えても満足できず、課題を残していると感じ、どのように表現したら、さらに明瞭な自分の「声」を伝えることができるだろうと自問した。このように自身の「声」をより良く表現することに対する探究心が、イタリア語による創作を含めた次の一作へと連鎖的につながってきたと考えている。

2017年のインタビュー(“Interview with Tyler: Writing, Translation and Crossing Between Cultures”)では、イタリア語による「挑戦」に関連して移民経験とその影響について語っている。そのインタビューの中で聴衆の一人が、Lahiri に移民経験について両親に尋ねたことがあるかと、移民経験を両親の経験であると前提にした質問を行った。それに対して、Lahiri は認識の誤りを正すように、移民経験がいかに両親のみならず、自分自身の経験であり、切実な問題となってきたかについて説明した。

I was living that experience. That was my whole experience. That was my whole life. There was no moment where I wasn't aware that my parents came from a place that was very far away, where people spoke a different language, and ate different food, and wore different clothes, and thought about the world in different ways, and that they were not there. And that's my life. That's my whole life, and there's no part of my life that was anything else.

作者は、両親が異なる言語と文化を有し、世界について他の人々とは違った見方をするということを意識しないときはなかったと語った。そして、家族と他者との関係はその認識を土台として構築されたものであり、

Lahiri も両親と共に日々移民経験を生き、生まれ育った国を離れて生きる
ことの影響を見てきたと感じている。移民経験は作者の人生の全てであ
り、多大な影響を与えていることを強調した。そして、このように二つの
文化を行き来し、意味を理解するというのは、通訳の立場のようであると
たとえ、常に同時通訳をしているような経験であると話した（And that
constant back and forth in one's being to make sense... it's like, again, the
interpreter; it's like being a simultaneous interpreter all the time）。また、
短編集のタイトルにもなった *Interpreter of Maladies* (1999) では、実際に
通訳を行う登場人物を描いたことに触れ、それは両親のため、そして、自
分のためにしたことであると語った（Of course, it's not ironic that my
book is called *The Interpreter of Maladies* and involves this character who
is literally interpreting simultaneously for people. But that's not what I was
necessarily doing for my parents, it was what I was doing for myself）。

イタリア・レスプレッソ誌のインタビューでは、イタリア語を全く必要
性がないのにも関わらず学んだことに触れ、実際の生活から言語を体験し
たいと考えたことや、別の文化の中で自分自身をさらけ出したかったとの
思いを話している。また、Lahiri の小説に出てくるキャラクターのほとん
どが「外国人」であるとし、自分も徹底的に同じ経験をしたいという願望
があったことを明かしている。⁴ このように「移民」として、「同時通訳」と
して生きてきたが、移民の経験をさらに内面化し、具体化させるため、イ
タリアに移ることを決めた。その場所で、実際にイタリア語で書くことを
通して自己と向き合い、自身を語る作品を書き上げた。

また、2017 年の別のインタビュー（“‘What Am I Trying to Leave
Behind?’” An Interview with Jhumpa Lahiri-On Translation, Origin
Stories, and Falling in Love with a Language”）では、イタリア語の選択と
翻訳の仕事に言及している。

I choose Italian, I choose to have an even more multifaceted life, I
choose a triangle in which I feel at ease. I feel my sense of belonging

with a few elements: my family, my children, my husband, my friends, literature, the pantheon of my most beloved writers. And I belong to Italian. Italian is a great love of mine, part of my identity.

Lahiri はイタリア語と多面的なライフスタイルを選択することの重要性について述べ、その中で子どもたち、家族や親しい友人と同様にイタリア語に属し、自身のアイデンティティの一部を成していると語った。彼女は *In Other Words* に関して、当初イタリア語での創作により「自由」を得たと話していたが、このインタビューではその意味と役割について、さらなる自己分析に基づく回答をしている。イタリア語への「逃避」(escape)、言い換えると言語による「変身」(metamorphosis) とし、自身がなぜその行動を必要としているかについて、その主要な理由を個人として、作家として変身したいという願望であると説明した。作家は書くときに、無防備になり、弱さを感じることは必要な経験であるという。作家として成功した現在も、書こうとするといつも違和感を感じ、その「居心地が悪い」(uncomfortable) という感覚の源を探るプロセスをたどらなければいけないと考えている (You need to dig where you don't feel comfortable. In this book, I ask myself: what am I running away from, why this metamorphosis, why this escape, where do I have to get to, what am I trying to leave behind?)。

Lahiri は作家として自己探求を行うために創作に向き合い、表現を追究しており、そのプロセスの中で「変化」を重要視している。そして、その自己探求のために創作のアプローチを模索し、関心のあるテーマについて、プレッシャーなく適切な言語形式と長さで書くためにイタリア語による創作に辿り着いた。また、作者は少女の頃、他の言語を「所有」し、そこに文化、故郷、国を見つけないという願望を持ち、その言語を通して、明確な自身のアイデンティティを見つけることを考えていたという (When I was a girl I wanted to possess another language, and through it find a precise identity, a culture, a country, a hometown)。しかし、「所有」した

いと考えることは葛藤を生み、「罨」のようなものであったと振り返る。彼女は自分の言語と呼べるものに対する欲望に突き動かされてきたが、イタリア語はとても近い関係をもたらしたと感じている。イタリア語は心を落ち着かせ、強い所属意識を感じさせるものであり、Lahiri にとって「外国語」ではない。イタリア語は彼女が強く望み、自発的に選択した言語である一方で、英語は環境が与えた言語であることに決定的な違いを感じている。

Italian is the language I have chosen: I cannot say “foreign”, because when I speak and read in Italian I feel at home. I feel this strong sense of belonging, even if it’s not real because I’m not Italian. Italian does not belong to me completely, and yet it belongs to me because it’s a relationship I have chosen and strongly wanted. The problem with English and Bengali is that they have both been imposed. While Italian is an unusual path, an unexpected one, and comes from me only. English just comes from the environment, because I grew up here.

イタリア語との出会いは、Lahiri に「別の人生」を与え、非凡で圧倒的な関係をローマと持つことを可能にした（The language changed everything: it gave me an extra life. It has even more emotional impact at my age）。Lahiri は *Unaccustomed Earth* (2008) において、「ローマにはコルカタを思わせるところがある」（370）と語り、イタリアはインドの記憶を呼び起こす場所でもある。新しい言語への「愛」は、若返ったように感じさせ、人生を豊かにしてくれ、子どもたちにも大きな影響を与えた。ローマに家を持ち、友人ができ、イタリア語は多くのものをもたらした。しかし、相反するように次第にアメリカで生活するのを困難に感じるようになり、この新しい場所との関係を重要視する上で、「故郷」および「祖国」（“home”）の概念は変化していった。このインタビューでは、ローマという「場所」に対して、特別な感情を抱くようになった経緯についても語った（The

first time I saw Rome, after a couple of hours I said to my husband: I absolutely have to live in this city. Why, I didn't care; I was overcome by a feeling, an urge to be in a place and have a relationship with that place)。

初めて Lahiri がローマを訪ねたとき、明確な理由もなく、この場所に住みたいという圧倒的な感情が湧き、「故郷」(home)であるかのように感じられた。この感覚を得たことについて、インドからイギリスを経てアメリカへと移民した Lahiri の父とアメリカとの関係を思い起こした。つまり、父がアメリカに抱いた感情と同様の感情を、作者はイタリアに持っていると考えに至った。その理由を追求することには関心を持たず、ただ特定の場所への「愛」をこれほどまでに感じられたことに満足していると語った。イタリアに身を置いて、移民の経験を内面化することを求めたことや、父との共通点や影響を語っていることから、成人してなおも続く Lahiri の両親の影響力の強さが窺える。Lahiri は確固たるアイデンティティを持たない人にとって、場所や言語を選択することは自然なことであると考え、肯定的に捉えている (It's strange and fabulous. It's like falling in love: that's the only possible explanation. I think that for some people, people with less fixed identities, it may be natural to choose, at some point, another place and also another language)。

2019年のインタビュー (“It's a silent conversation”: authors and translators on their unique relationship”)の中では、イタリア語の新作 *Dove Mi Trovo* (2018) について語り、自分の書いた作品を翻訳することに対する葛藤を明かしている。彼女の最新作である長編小説は、*In Other Words* とは異なり、Lahiri が英語に翻訳することを決め、現在も取り組んでいる。しかし、既に日本語を含む複数の言語に翻訳されているが、英語翻訳は未出版であるという事実を踏まえ、その苦労について語っている。自分が書いた作品を翻訳するということは、自分が二人に分かれて存在しているような場所に入る大きな挑戦であると説明した (“The problem is: how do I turn myself back on myself? Mentally I have to go into a place where I'm two people”)。

また、2019 年の別のインタビュー（“‘No Language Has Power Over Another’: A PEN Ten Interview with Jhumpa Lahiri”）では、イタリア語作品の英語短編集 *The Penguin Book of Italian Short Stories* (2019) の一部の作品の翻訳を行い、本短編コレクションの編者を務めたことに関連し、創作の意義と社会的役割について意見を述べている。作家がどのようにして社会運動に影響することができるのかという問いに対し、Lahiri は創作は抵抗のあり方の一つであると位置づけている。

I believe that all writing is a form of resistance. The aim of literature is to contradict convention, to challenge banality, to turn reality on its head, and to defy the passage of time. Translation takes things a step further. The process of translation makes clear that no one language has power over another. Many of the Italian writers in the anthology translated as a way of challenging and opposing Fascism. A willful act of border-crossing, translation is a means of rejecting and contradicting the xenophobic mentality circulating throughout much of the world today.

ここでの文学の目的は慣習を疑い、現実を逆転させ、時の流れに逆らうこととして語られている。そして、翻訳はさらにその挑戦を深化させ、また、どの言語も他の言語より、権威を持ち支配することはないと述べている。多くのイタリア人作家たちがファシズムに挑み、抵抗するために翻訳を行った歴史的事実から、意図的な越境である翻訳は今日の世界に蔓延している外国人差別のメンタリティ（ゼノフォビア）を否定する手段となると主張している。

以上のように、インタビューからイタリア語の創作の動機と背景、言語とアイデンティティ形成との関連について検討した。作者にとって創作が自己探求の手段であり、社会的役割を担う意義を持つことが明らかになった。

4. *In Other Words*: Lahiri と言語との関係

次に *In Other Words* から作者と三つの言語とアイデンティティの関係、「変身」(metamorphosis) への願望と創作への影響について、分析と考察を行う。*In Other Words* は、それぞれのテーマに分かれた17章と2編の短編から構成され、比喩やイメージが豊富に使用されている。自問自答が多く用いられ、創作のプロセスの中で日記のように自身との対話と思考の場として機能してきたことが窺える作品である。

本作中の“The Fragile Shelter”では、作者が言語を重要視し、「書くこと」を幼少の頃から自己の存在を確認するものとして位置づけている。祖国や特定の文化を持たないため、「書くこと」がアイデンティティとつながり、書いていなければ自身の存在を感じられない—“Ever since I was a child, I’ve belonged only to my words. I don’t have a country, a specific culture. If I didn’t write, if I didn’t work with words, I wouldn’t feel that I’m present on the earth” (87). さらに、創作は自身の「存在の謎」(58)を探るという自己理解と探求の手段であるだけでなく、他者と外の世界への理解を深めるために行われている—“Why do I write? To investigate the mystery of existence. To tolerate myself. To get closer to everything that is outside of me” (87).

“The Exile”では、ベンガル語について書いている。両親から学んだ母語であるベンガル語はアメリカでは外国語であり、「秘密の未知の言語」(18)であった。周囲の環境と一致しない外国の言葉を母語にすることは、長年に渡って疎外感を感じさせた。

In a sense I’m used to a kind of linguistic exile. My mother tongue, Bengali, is foreign in America. When you live in a country where your own language is considered foreign, you can feel a continuous sense of estrangement. You speak a secret, unknown language, lacking any correspondence to the environment. An absence that creates a

distance within you (19).

また、その母語であるベンガル語も完璧に話すことができないという事実は、さらなる問題を生じさせる。読み書きができず、訛りがあって会話にも自信がなく、作者とベンガル語には隔たりがあると感じてきた。そのため、Lahiri にとってベンガル語は母語であり、また、外国語でもある。

In my case there is another distance, another schism. I don't know Bengali perfectly. I don't know how to read it, or even write it. I have an accent, I speak without authority, and so I've always perceived a disjunction between it and me. As a result, I consider my mother tongue, paradoxically, a foreign language, too (21).

本作の“Triangle”の章では、Lahiri は言語を擬人化し、関係性について説明を試みている。ここでは、最も重要な三つの言語について、比喩を用いて各言語との関係を過去に溯り、探っている。⁵ その説明の中では、「母」がベンガル語、「継母」が英語として擬人化されている。Lahiri は、アメリカで生きていくために両方の言語を上手に操らなければならなかった過去の重圧を語っている—“I realized that I had to speak both languages extremely well: the one to please my parents, the other to survive in America. I remained suspended, torn between the two” (149). この重圧による葛藤は、「私は二つの言語のどちらとも一体になれなかった」(96) と Lahiri に苦悩と挫折の経験をもたらした。その結果、「母と継母も拒否」(99) し、逃れて辿り着いた「自立した道」(99) として、重要な役割を持つようになったのがイタリア語である—“I think studying Italian is a flight from the long clash in my life between English and Bengali. A rejection of both the mother and the stepmother. An independent path” (153). これらの三つの言語が彼女の中で「三角形」を成しているという。

英語は幼少の頃は「他人の言葉」(95) と考えており、そのため、幼稚園

でも友人や先生と信頼関係を構築することは難しく、英語で感情を表現することにも困難があった。このようにコミュニケーションの問題を抱えて精神的に辛く、ベンガル語を話すことのできる家へとただ帰りたいと考えていた。しかし、6歳頃に読書を始めるようになると、ベンガル語と英語の位置づけが変化する。ベンガル語という「母」は彼女を一人で「育てること」(96)ができなくなった—“From then on my mother tongue was no longer capable, by itself, of rearing me. In a certain sense it died. English arrived, a stepmother” (147)。ここでベンガル語は「死」を迎え、「継母」である英語が現れた。作者は次第に「継母」を知り、読み解くために英語での読書に没頭するようになるが、そこには「口うるさい亡霊」(96)としてベンガル語が存在していた—“I became a passionate reader by getting to know my stepmother, deciphering her, And yet my mother tongue remained a demanding phantom, still present” (149)。家ではベンガル語、学校を含めた公共の場では英語を使う生活において、作者は英語を話す「わたしの中の別の人間」(96)を見出すようになった—“The part of me that spoke English, that went to school, that read and wrote, was another person” (149)。

しかし、二つの言語のどちらもアイデンティティとして完全には受け入れられず、「一体」(96)になれなかったとしている。外の世界は英語環境であったが、両親とその友人たちとはベンガル語を話すように言われており、家で英語を話すことは禁じられていた。英語はLahiriとその家族にとって「アメリカ」を象徴し、二つの言語と文化による二重生活に葛藤と矛盾を感じていた。Lahiriは、両親を喜ばせると同時にアメリカ社会で生きて行くため、二つの言語を極めて上手に話さなければいけないと理解した。そのような状況に置かれて、引き裂かれたような心境だった—“I realized that I had to speak both languages extremely well: the one to please my parents, the other to survive in America. I remained suspended, torn between the two” (149)。二つの言語は相容れず、おたがいを敵視しているようであった。この二つに共通する点はなく、作者は自身も矛盾を表し

ているように感じられた—“These two languages of mine didn't get along. They were incompatible adversaries, intolerant of each other. I thought they had nothing in common except me, so that I felt like a contradiction in terms myself” (149).

Lahiri の両親が家庭でベンガル語を話すことを求めていたことについては、ベンガル語が、「両親に属している部分」(97)であり、家族にとって英語は「アメリカ」を表し、「染まりたくない他国文化を象徴」(97)していたからであるとしている—“For my family English represented a foreign culture that they didn't want to give in to. Bengali represented the part of me that belonged to my parents, that didn't belong to America” (149). 一方で、アメリカの学校の先生や友人は、Lahiri がベンガル語を話せることについて、全く関心を持つことがなかった。アメリカの人々にとって、ベンガル語は「遠方の、得体の知れない怪しげな文化」(97)であり、意味を持たず、容易に無視できるものであった。

Just as English did for my parents, Bengali represented for the Americans I knew as a child a remote culture, unknown, suspect. Or maybe in reality it represented nothing. Unlike my parents, who knew English well, the Americans were completely oblivious of the language that we spoke at home. Bengali was something they could easily ignore (151).

作者は当初、公の場で使用する英語に対して抵抗感を持っていたが、学校生活において英語で教育を受けることを通して「英語と一体化」(97)していった。次第に「アメリカ人」としてのアイデンティティを持ち、友人と同じようになりたいという願望も持つようになった。ベンガル語を話すことを恥と感じ、その言語との関わりを隠し、否定するようになっていった—“I wanted to hide, as far as possible, my relationship with the language [Bengali]. I wanted to deny it” (153). このように西洋中心主義と英語へ

ゲモノーによる英語および「アメリカ」の優位性は、言語に対する意識や態度に影響を与えた。そして、Lahiriの自尊心や両親への関係性にも影を落としてきたことを明かしている。

両親が英語を完璧に話せないことやアクセントのある英語を話すことは、日々アメリカにおいて「壁」に直面することになり、継続的な緊張感と不安へとつながっていく経験であった。両親が英語を間違えると苛立ち、作者が持っていて両親が持たない能力があるという事実が受け入れられず、両親も同じように英語を話せるようになってほしいと願っていた—
 “And yet it annoyed me as well when my parents mispronounced the English word. I corrected them, impertinently. I didn’t want them to be vulnerable. I didn’t like my advantage, their disadvantage. I would have liked them to speak English as I did” (153). Lahiriは英語を話せないことを両親の「弱み」(98)と感じていたと書いている。しかし、両親に英語を上手に話してほしいと考え、両親がベンガル語を話すことを恥ずかしく感じながら、そのことについて罪悪感を持つような相反する感情もあった。Lahiriが英語を話せることは、両親との距離を感じさせ、孤独感をもたらしていた—
 “I was ashamed of speaking Bengali and at the same time I was ashamed of feeling ashamed. It was impossible to speak English without feeling detached from my parents, without an unsettling sense of separation. Speaking English, I found myself in a space where I felt isolated, where I was no longer under their protection” (151). 上述のように、英語に対する不安は個人のみならず、移民の家族や子どもたちにも不安を与えており、次世代に心理的な影響を及ぼすことを示唆している。

二つの言語と文化の間で葛藤しながら育った作者は、25歳の頃に妹とフィレンツェを旅して、イタリア語を「発見」(99)した。家族や社会から強制されて習得したベンガル語や英語とは異なり、作者にとってイタリア語を学ぶ必要性はなかった—
 “I had to joust between those two languages until, at around the age of twenty-five, I discovered Italian. There was no need to learn that language. No family, cultural, social pressure. No

necessity” (153). 当初「逃避」のようにして選択されたイタリア語は、英語とベンガル語との従来の言語との関係に「点」のようにして追加され、この三点が三角形を作った。イタリア語は英語とベンガル語の確執のある関係の「力学」(99) も変化させた。

The arrival of Italian, the third point on my linguistic journey, creates a triangle. It creates a shape rather than a straight line. A triangle is a complex structure, a dynamic figure. The third point changes the dynamic of that quarrelsome old couple. I am the child of those unhappy points, but the third does not come from them. It comes from my desire, my labor. It comes from me (153).

三角形の三つの点を成す言語のうち、二つは与えられ、一つは選択により獲得した言語であり、主体性が発揮されている点においてイタリア語はベンガル語とも英語とも異なっている。イタリア語への没頭は、「逃避」というイメージを持ちつつも、イタリア語と英語の関係についてより正確な理解を得る。つまり、英語とイタリア語はラテン語起源であり、多くの言葉を共通して持つため、英語の理解の助けになる。しかし、英語で語根の意味を知っているという先入観から、誤読してしまうこともある。このようなことから、イタリア語を学ぶことは英語の理解を深めることでもあるため、「逃げることは同時に帰ること」(100) と考える。

この「第三の言語」での挑戦と実験への衝動がどこから来るのか、そして、その三角形が未来の自己に与える影響を自問し、各言語の持つ重要性和その関係性は変化するものであることを示唆する。ベンガル語とイタリア語の二言語は、「鉛筆で書かれた点と線」に形容され、消滅可能性を比喩的に表現している。ベンガル語は過去を象徴し、「両親によって具体化され、擬人化されている言語」(101) として、将来消えてなくなってしまう可能性が不安とともに示されている。

English remains the base, the most stable, fixed side. Bengali and Italian are both weaker, indistinct. One inherited, the other adopted, desired. Bengali is my past, Italian, maybe, a new road into the future. [...]. I'm scared that the pencil sides might disappear, just as a drawing can be rubbed out by an eraser. Bengali will be taken away when my parents are no longer there. It's a language that they personify, that they embody. When they die, it will no longer be fundamental to my life (157).

イタリア語は「将来の新しい細道」(101)であると同時に永久に「外部の言語」(101)であり、Lahiri がイタリアを去り、その言語を追求することをやめてしまえば、ベンガル語と同様に消滅してしまうだろうと考えている。一方で、三角形の「点」としての英語は現在を象徴し、幼少期からの英語は長い葛藤と苦悩の末、「永遠に明瞭で正確な声」(101)を与え、コミュニケーションと創作のための言語として揺るぎない地位を築いている—“English remains the present: permanent, indelible. My stepmother won't abandon me. Even though the language was imposed on me, it has given me a clear, correct voice, forever” (157)。

これらの三つの言語が織り成す三角形は、「額縁」のイメージとして捉えられ、作者はその中に見えない「自画像」を見ようとしてきた。その「自画像」は明確で具体的な全身像であることを期待したが、実際はそれとはほど遠い、断片化された混成物であり、「あいまいで不明瞭な姿」(102)であった。それを二重のアイデンティティのためであると考えている。

All my life I wanted to see, in the frame, something specific. I wanted a mirror to exist inside the frame that would reflect a precise, sharp image. I wanted to see a whole person, not a fragmented one. But that person wasn't there. Because of my double identity, I saw only fluctuation, distortion, dissimulation. I saw something hybrid, out of

focus, always jumbled (157).

Lahiri の人生における自己探求は、「額縁」に自身の姿を見ようとするこ
ととして比喩的に表現されている。しかし、そこに映る自己は期待するよ
うな形ではないどころか、「空白」(102) なのではないかという怖れを持っ
ている—“I think that not being able to see a specific image in the frame is
the torment of my life. The absence of the image I was seeking distresses
me. I'm afraid that the mirror reflects only a void, that it reflects nothing”
(157-59). 自己との対話の結果から、その全ての不確実性こそが「原点」
(102) となり、Lahiri の運命であるとして受け入れ、創造の源と考えるに
至る。作者が持つ「自画像」を描き出したいという欲求が、創造への衝動
につながっていると肯定的に捉えるようになる—“I come from that void,
from that uncertainty. I think that the void is my origin and also my destiny.
From that void, from all that uncertainty, comes the creative impulse. The
impulse to fill the frame” (159). このように「三角形」は自己を説明する
イメージとなり、彼女の過去と現在のアイデンティティは深く三つの言語
と結びついている。創作を通した不確実な自己に対する探求は、創造力の
源になり、表現への原動力と認識している。

次に英語とイタリア語について、翻訳の仕事との関連に注目する。本作
の“Hairy Teenager”では、イタリアで開催された文芸フェスティバルの
二か国語パンフレットに、「勝者と敗者」というテーマで、Lahiri が英語と
イタリア語の両方で書かれた自身の文章を載せることとなり、翻訳に苦労
した経験が語られる。当初は簡単な作業と考えていたが、イタリア語で考
え、書いた文章を英語に翻訳すると、各言語による表現力に差が生じた。
イタリア語をそのまま翻訳してみると、新しいアイディアが上手く表現で
きないが、英語を用いると自由自在で豊かな表現力に圧倒される—“I'm
overwhelmed by the richness, the power, the suppleness of my English.
Suddenly, thousands of words, nuances, come to me” (117). 英語の表現力
の確実性と安定性は、両言語の格差を際立たせて Lahiri を消沈させ、作家

としての自己を見失うような体験になる。イタリア語の文章を英語に翻訳することにより、文章の質と内容が変化することをイタリア語への「裏切り」のように感じてしまう—“Who is this writer, so well equipped? I don't recognize her. I feel unfaithful. I fear that, against my will, reluctantly, I have betrayed Italian” (117). ここでは言語も「勝者」と「敗者」に擬人化して形容する。しかし、この擬人化によるイメージも固定的なものではなく、複数の異なるイメージを持つものによって比喩的に表現される—“Compared with Italian, English seems overbearing, domineering, full of itself. I have the impression that English has been in captivity and, having just been released, is furious. Probably, feeling neglected for almost a year, it's angry at me. The two languages confront each other on the desk, but the winner is already more than obvious” (117). 英語は抑圧的かつ支配的であり、一年近くも監禁され、無視されてきたことを不当とし、怒っているのであろうとたとえる。この二言語は翻訳の机の上で対立するが、「勝者」は明らかに英語となる。

同章では、英語とイタリア語を「兄」と「弟」としても表現し、その二言語を自分の「子ども」のように感じ、それぞれの言語に対する不均衡な位置づけについて語る—“They aren't equal, these two brothers, and the little one is my favorite. Toward Italian, I'm not neutral” (117). この「二人の兄弟」は、イタリア語が母親のケアと保護を必要とする新生児の「弟」、そして英語は、思春期のティーンエイジャーの「兄」である—“I want to protect my Italian, which I hold in my arms like a newborn. It has to sleep, eat, grow. Compared with Italian, my English is like a hairy, smelly teenager” (117-19). このように二つの言語の翻訳のプロセスは、自己が二つに分裂したようなイメージを持たせ、緊張と困難を感じさせる苦行として捉えられている。そして、英語への翻訳の作業は、「同時に二人の違った人間でいなければならない」(78)と感じられた苦い過去を呼び起こす経験となる。

しかし、翻訳そのものに対しては、創造的な行為として肯定的に捉えて

いる。翻訳は「読む」と深く親密に関係していて、この二つの言語と文章の動的かつ素晴らしい出会いは「再生」(78)をもたらすという―“I think that translating is the most profound, most intimate way of reading. A translation is a wonderful, dynamic encounter between two languages, two texts, two writers. It entails a doubling, a renewal” (121). Lahiri によると、ラテン語やベンガル語からの翻訳経験は、時間と空間の境界を乗り越え、異なる言語で語る遠くの作家たちと、自分を結びつけてくれる可能性に満ちたものであった。しかし、初学者であるイタリア語を用いて翻訳を行うことは、上述のように苦労が圧倒的に多い。それでも、作者には試行錯誤からの新しい発見がある創作の実験となり、達成すると大きな満足感を得られる。

緊張関係にあったイタリア語と英語が翻訳のパンフレットとして形になると、二つの言語がそれまでの葛藤を乗り越えて共存し、落ち着いて見えてくる―“The English is mute, fairly tranquil. Printed and bound, the brothers tolerate each other. They are, at least for the moment, at peace” (121). パンフレットの中で、その「兄弟」の戦いに決着が着いたという表現が、言語による挑戦を象徴的に表す。ベンガル語と英語については、「母」および「継母」と比喩を用いたが、翻訳に取り組むに当たり、英語とイタリア語を「兄」と「弟」の関係に見立て、関係性を探求している。ここでは親子と兄弟の家族関係に形容し、ジェンダーの入れ替えも行われ、比喩の変化から言語とその関係の流動性を強調しているようである。

“The Wall” では、言語を使用する中で、Lahiri の名前と外見が「境界」となり、「壁」となってきた体験について語っている。作者はローマで生活して2年が経ち、サレルノに家族で旅行に行った時に子ども服の店で女性店員に相談しながら、娘と息子の服を選んでいた。そこに Lahiri の夫（ギリシャ系アメリカ人）が加わり、イタリア語で簡単な会話をした。20年以上イタリア語を勉強してきた Lahiri と比べて、夫はイタリア語を話せず、知らない単語も多くあり、間違えることがしばしばあった。しかし、その後、レジで支払いをしていると女性店員から夫がイタリア人と間違われていた

ことを知る。そのことが外見による先入観と考え、ショックを受ける。外見が与える先入観は、イタリア語と彼女の間にある、越えられない「境界」となっていることを認識させられ、Lahiriに怒りと嫉妬の感情を呼び起こした—“Here is the border that I will never manage to cross. The wall that will remain forever between me and Italian, no matter how well I learnt it. My physical appearance” (137).

それでもなお、外国語を学ぶことは、新しい国でのコミュニケーションと関係構築を可能にし、存在が認められ、「声」や「力」を手にするにつなると理解し、価値を置いている—“Learning a foreign language is the fundamental way to fit in with new people in a new country. It makes a relationship possible. Without language you can't feel that you have a legitimate, respected presence. You are without a voice, without power” (141).

Lahiriは英語を母語話者のように話し、アメリカ人作家として評価されているにも関わらず、アメリカでも「壁」は存在している。人々が彼女の名前と外見により「外国人」であると思いつくという。そして、人々は出身を尋ね、なぜ英語で書くのかと聞くことがあり、完璧に話すことができても、英語を使うことを正当化する必要が生じることを不条理に感じている。インドでさえ、「壁」は避けられない。多くの人々が、彼女が外国で生まれ育ったために英語を話し、ほとんどベンガル語を理解しないと思いつく。インドではLahiriの名前と外見にも関わらず、人々が英語で話しかけ、彼女がベンガル語で返答をすると驚くという。

このようにイタリア、アメリカ、インドと場所を問わず、人々は彼女がアイデンティティの一部としている言語を話すとは考えない—“No one, anywhere, assumes that I speak the languages that are a part of me” (143). ヨーロッパ系の移民と比較し、その身体的特徴からアジア系アメリカ人は三世や四世となっても、「外国人」として扱われ、人種差別の被害に遭う傾向があるとされる。メディアもアジア系アメリカ人に対する差別的なステレオタイプについて責任があり、主流文化による美の基準とは対照的なエ

キゾチックなキャラクターを演出している。エスニシティはアジア系アメリカ人の自己形成に重要な役割を果たしているため、差別は伝統文化の否定につながり、アジア系の外見的特徴や身体に対する自尊心の低下を招き、深刻な問題となっている（Cash and Pruzinsky 246-47）。

この章では「壁」は二つの意味で表現されている。一つは、上述のように名前や外見が「壁」となり、アイデンティティの一部とする言語との関係を阻害することであり、もう一つは、言語習得のプロセスにおいて直面する「壁」である。Lahiri はこの言語の「壁」について、創作の上ではその「壁」がどんなに大変なものであっても、さらなる関心へとつながり、インスピレーションを与えるとして肯定的に捉えている—“When I write in Italian I have to accept a second wall, which is very high and even more impermeable: the wall of language itself. But from the creative point of view that linguistic wall, however exasperating, interests me, inspires me” (145)。

Lahiri は作家として、言語と密接な関わりを持ち仕事を行うが、作者と言語の間に壁は常に存在し、距離を生み出し、分離させようとする。どこに行ってもその「壁」に取り囲まれるイメージから、「壁」は自分自身ではないかと考える—“The wall is inevitable. It surrounds me wherever I go, so that I wonder if perhaps the wall is me” (143)。「壁」を言語学習の困難や自分自身の象徴とする Lahiri には、書くことは「壁」を壊すことであり、名前や外見が生み出す偏見から解放されるための行為である。

I write in order to break down the wall, to express myself in a pure way. When I write, my appearance, my name have nothing to do with it. I am heard without being seen without prejudices, without a filter. I am invisible, I become my words, and the words become me (145)。

このように作者にとって創作は偏見を乗り越え、言葉と一体化し、言語を内面化させることにつながる。

“The Second Exile”の章では、アイデンティティと言語の関係において、自身が「亡命」(exile)の定義に当てはまらない存在であることを説明している。「亡命」や「帰国」という概念は、祖国がある人々を前提とし、祖国も本当の母国語も持たない作者は、創作の中で、そして現実の世界で彷徨よい、「亡命」という定義からも疎外されているという—“Without a homeland and without a true mother tongue, I wander the world, even at my desk. In the end I realize that it wasn't a true exile: far from it, I am exiled from the definition of exile” (133).

本章では、両親の経験にも言及している。父と母の故郷であるコルカタからの手紙は両親に「自分の言語を思い出させ、失われた人生を現在によみがえらせて」(83)くれるという。言語は人々や社会を含め全てのものとつながりをもたらしてくれるという点で重要であり、そのため、人が自己のアイデンティティの一部と考えている言語と離れている時にはできる限りのことを行い、その言語を「生きたまま」にしようとする—“When the language one identifies with is far away, one does everything possible to keep it alive. Because words bring back everything: the place, the people, the life, the streets, the light, the sky, the flowers, the sounds” (127). Lahiri はイタリア人ではなく、バイリンガルではないため、同様ではないものの、似た感覚をイタリア語に対して感じるようになる。ローマで1年暮らした後に、1ヶ月アメリカに帰ることがあった。アメリカでの生活ではイタリア語を聞き、話すことができないことが悩みとなった。日に日にイタリア語を求める気持ちが高まっていくと同時に、英語に対しては、関心を失っていくことが「二重の危機的状況」(84)として感じられていた—“Now I feel a double crisis. On the one hand I'm aware of the ocean, in every sense, between me and Italian. On the other, of the separation between me and English. I'd already noticed it in Italy, translating myself” (129). 幼少の頃から親しみ、教育を受け、作家となるまで用いてきた英語に違和感が生じた経験は、彼女のアイデンティティと言語との関係で再考させた。

Why don't I feel more at home in English? How is it that language I learned to read and write in doesn't comfort me? What happened, and what does it mean? The estrangement, the disenchantment confuses, disturbs me. I feel more than ever that I am a writer without a definitive language, without origin, without definition (129-31).

英語との距離が離れていく感覚は不安を与え、Lahiri が言語と祖国、そして「定義」を持たない作家であるということを再認識させていた。それは、自身の作家としてのアイデンティティへの疑問につながっていった。

作者は“The Imperfect”の章で、自己を文法用語である「半過去」(imperfetto) に重ね合わせている。半過去は、イタリア語の時制の中で最も多様な特性と用法を持つとされ、動作の未完了や過去における継続・反復・進行を表す。また、物事や状況が「流れている状態」を指すことや「非現実」や「超現実」など目に見えない世界を述べる特性を持つ。⁶ このことから、Lahiri は、流動的で未完成な自己イメージを持っていることがわかる。本章で自身は半過去、つまり「始まりと終わりの境界のない開かれた行為」(72) であり、また、英語の文字通りの意味である「不完全」(imperfect) な存在として説明している。そのため、常に欠陥のある人間のように感じ、これまで継続して自分を改善しようとしてきたという―“I identify with the imperfect because a sense of imperfection has marked my life. I've been trying to improve myself forever, correct myself, because I've always felt I was a flawed person” (111).

Lahiri の苦悩は、「自分と一体化できる言語を欠いている」(73) ことであり、両親のようにもなれず、「アメリカ人」にもなれなかったことに由来する。アイデンティティが二つに分かれていることや性格を理由に、Lahiri は自身を不完全だと考えた。言語は幼少の頃から彼女と両親との関係を複雑なものにし、影響を与えてきた。アメリカに暮らしながら、両親を満足させ、彼らの娘であることを自分のためにも証明しようと、アクセントのないベンガル語を完璧に話す努力をしたが、それは不可能だと悟る

挫折を早くから経験した。また、相反するように「アメリカ人」として見られたいという願望も抱いていた。しかし、これは英語を完璧に話しても不可能であり、アメリカに根づくというより、二つの文化の間に漂うような不安感が現在までも続いている。

他方のイタリアでは、今まで以上に「不完全」であると感じているにも関わらず、不思議と居心地がよく感じられている。大人になってなぜこの新しい言語との関係に興味湧くのかについては、イタリア語の創作がもたらす「不完全」の感覚が、顕著にインスピレーションを与え、刺激を与えてくれることを理由に挙げている—“Imperfection inspires invention, imagination, creativity. It stimulates. The more I feel imperfect, the more I feel alive” (113).

“The Metamorphosis”と題した章では、二つの文化とアイデンティティに葛藤してきた Lahiri の変身願望を取り上げ、言語との関係性も自身の変化により、変容していくことを示している。“metamorphosis”は完全な変化を指し、「変身」による変化は「暴力的な再生のプロセス」(105)であり、「死」と「誕生」として表現されている—“Metamorphosis is a process that is both violent and regenerative, a death and a birth” (163).⁷ Lahiri は本章で、母との関係について述べている。自身を「わたしは自分を決して変えようとしなかった母の娘」(108)として、母と対比的に説明している。母はアメリカに移民しても、インドで身につけた生活習慣と外見を保つ努力をしていた。それは、母にとってアメリカ文化への抵抗であり、自己のアイデンティティを維持するための戦略であったという。「アメリカ人」になることは Lahiri の母にとって、「完全な敗北」(108)と考えられ、インドに帰るとその地で暮らしてきた人のように見られることを誇らしく感じていた。母が祖国の文化と伝統を守り、「変化しないこと」をアイデンティティとしたが、Lahiri は対照的に反抗のために変化を求め、追究することを選んだ—“I am the opposite. While the refusal to change was my mother’s rebellion, the insistence on transforming myself is mine” (169). このように、Lahiri は母の美德と価値観に反抗し、「変身」を自身のアイデ

ンティティとして考え、イタリア語の挑戦もその一環であり、変化に対する願望が強い。

In Other Words に収録されている二編の短編作品の一つである “The Exchange” においても、別の人間になりたいと考える女性が主人公であり、自身がモデルとなっている。⁸

“There was a woman...who wanted to be another person”: it's no accident that “The Exchange,” the first story I wrote in Italian, begins with that sentence. All my life I've tried to get away from the void of my origin. It was the void that distressed me, that I was fleeing. That's why I was never happy with myself. Change seemed the only solution, writing, I discovered a way of hiding in my characters, of escaping myself. Of undergoing one mutation after another (169).

Lahiri は、「自分の原点の空白」(108) に悩まされ、逃れようとしていた。「変化すること」は唯一の解決法に見え、書くことにより、自分の創り上げた人物たちに隠れ、自分から逃れる方法を発見した。そこでは、変化し続けることが可能であった。物語は、名のない女性主人公が旅行に出るところから始まる。旅先で「セーター」を失くしてしまったと感知るが、別のセーターに見えたものは、実際には自分のセーターであったことに気がつく。そして、その短編を書き終えてから、この変化するモチーフであるセーターが、言語の比喩であると気がついたと語っている。⁹ この物語の旅は、出発地点も行先も明らかにされない。*Dove Mi Trovo* の主人公も旅を控えていることにも見られるように、旅も変化を模索する試みの一環であり、言語とともに変化を象徴している。

“The Story” では、これまでの創作の手法について明かしており、最近の創作傾向と比較すると、変化が認められる。イタリア語で創作をする前の彼女の作品は、インド系アメリカ人とコミュニティに対する観察を基に描かれ、学生に対しても教授している自身の創作のアプローチに従い、特定

の人、時間、場所など具体的なものに焦点を合わせて物語を展開してきた。そして、作家は存在しない世界を想像する前に、現実の世界を観察すべきであると考え、作品に反映させてきた。¹⁰ Lahiri はイタリア語での創作を始めて、人、時間、場所に焦点を置くスタイルは変えてはいないが、それらを抽象的に表現し、匿名性を持たせるようになった。作者は、これまでのようにモチーフを特定せず、匿名にすることにより意味が広がると語っている。¹¹ そのため、“The Exchange”や、以下に述べる *Dove Mi Trovo* は、その方針を取り入れていると解釈できる。また、これまで直接的に自分自身のことは書いてこなかった作者が、イタリア語では自己を投影した主人公像を描き、創作への影響が見られている。¹²

5. *Where I Find Myself*: Lahiri のイタリア語による創作実験

Dove Mi Trovo は英語では未完であるが、題名は *Where I Find Myself* と訳されている。本作はイタリア語で初めて出版した長編小説であり、一人の旅立ちを迎えようとする女性主人公をめぐる日常を描いた作品である。物語では主人公の名は明かされず、住む場所についても、作家に関する情報と合わせて考えればローマであることが推測されるが、作品中では明らかにされていない。他の登場人物も同様に名はなく、場所も地名も書かれていない。

主人公は「孤独」な存在であるが、ここでの孤独は肯定されるべきものとして描かれている。従来の Lahiri の作品の登場人物を取り巻く環境では、孤独は“exile”や“displacement”など自分の意思によらずに孤立する状況にあり、疎外と喪失のイメージが強いものであった。しかし、その感情は能動的に選択した意味を持つ孤独である“solitude”に変化しているように見え、意味が異なってきている。¹³ 主人公が身を置く場所は、孤独を受け入れて生きる彼女に強い共感を与える空間である。この作品の主人公にとって時空間は特別な意味を持ち、彼女は時間と空間を自由にできる力を持っていると語りつつ、時間に縛られ、不安感を煽られているという葛藤と矛盾が見られる。そして、主人公は別の土地への旅立ちを控え、慣れ親

しんだ地域を歩いていると、その街角で別の自分の姿を発見する。離れる場所にも別の土地にも存在する主人公は「中間性」を象徴し、「第三の場所」を求めて生き、自己探求の道程にあるポストコロニアルなディアスポラ主体である。本作では両親との緊張と確執の関係も描き、変化しない存在として主人公と対比的に描写され、*In Other Words* でも言及されてきた変化の重要性は、主人公の言動を通して明確に強調されている。

Lowland (2013) では、インドとアメリカの歴史的事実を重要な背景とし、インド系アメリカ人作家としての期待と役割意識を感じ、作者が Realistic novel と呼ぶジャンルで、インドとアメリカを描いた。¹⁴ しかし、現在は作家として社会的役割を意識しながらも、既成概念に囚われず、自身の「声」をより明瞭に表現することに価値を見出している。*Dove Mi Trovo* は実験的な作品であり、主人公には言語と文化の間で葛藤した作者が投影されていると解釈でき、その存在は現代の「アメリカ」と「アメリカ人」について、また、特定の場所に生きることを問うているようである。

6. おわりに

本論では、インタビューと *In Other Words* を中心に、英語では未完の長編小説 *Dove Mi Trovo* についても取り上げ、Lahiri の言語実験とアイデンティティ、創作との関係について考察した。

Lahiri は *Unaccustomed Earth* (2008) で既存のアメリカ文学のカウンターナラティブと位置づけられる登場人物のグローバリティを描いた（渡部 75-77）。グローバリティとはグローバル経済、政治、文化、環境に特徴づけられた社会的状況であり、多くの既存の境界を無効なものとする流れである（Ty 142）。Lahiri のイタリア語による創作は、アメリカで育ち、長い間感じてきた社会的抑圧から自由になること、また作家として変化し、進化していくための挑戦である。この創作実験は、複数言語によるアイデンティティの可能性を示唆するものとなり、作者自身のグローバリティの

体現を印象づけた。

Lahiri は創作について、不安と恐れを抱えて向き合う「調査」(investigation)、「実験」(experiment)、「挑戦」(challenge)の行為であると言いつ表している。¹⁵ 作者のイタリア語の最新作が、日本語を含め複数の言語に既に翻訳・出版されているのにも関わらず、現時点でまだ英語訳が出版されていない事実からも、現在も彼女と言語による実験と挑戦が継続していることが推測される。英語、ベンガル語、イタリア語との個人的な歴史を経て、言語は作者の重要なアイデンティティの構成要素となっている。イタリア語は思考と自己の対話の場として機能し、自己表現を促し、国境および時空間からも解放された主体を作り出した。Lahiri の言語とアイデンティティの関係は、固定的なものではなく、時と場所、人々との関係から変化し、作者の人生と創作に多大な影響を与えていることが明らかになった。

注

本研究は JSPS 科研費 JP15K21311 の助成を受けている。Lahiri 作品の日本語訳については *Unaccustomed Earth* は『見知らぬ場所』(小川高義, 新潮社, 2008 年), *In Other Words* は『べつの言葉で』(中嶋浩郎, 新潮社, 2015 年), *Dove Mi Trovo* は『わたしのいるところ』(中嶋浩郎, 新潮社, 2019 年)の既存の訳を参考にさせていただいた。引用に付したページ番号は、英語については原作の英語訳書、日本語については和訳書によるものである。

- 1 *In Other Words* (2016) は、Lahiri が *In Altre Parole* (2015) としてイタリア語で書かれたエッセイの英語翻訳である。この作品は彼女の希望で自身では英語の翻訳は行わず、Ann Goldstein に翻訳させた。Lahiri は自著を英語に翻訳することに困難を感じると作品中やインタビューで語っている。*In Altre Parole* についての主たる本文の引用部分は、Lahiri が Author's Note (序文) と Afterward (後書) で解説を行っている英語翻訳書 *In Other Words* (2016) を用いた。
- 2 「訳者あとがき」, 『べつの言葉で』, p130-31。
- 3 *The Clothing of Books*, p55.

- 4 「訳者あとがき」, 『べつの言葉で』, p131。
- 5 “Triangle” の議論については, 拙論『『見知らぬ場所』に生きる— Jhumpa Lahiri の短編作品における『新アメリカ人』の越境とグローバリティ』と重複する部分がある。
- 6 イタリア語における「半過去」の説明については, (小林 2001, 2006) を参照した。
- 7 metamorphose: to change or make someone change into completely different, especially over a period of time. 『オックスフォード現代英英辞典』参照。
- 8 “Afterwards,” *In Other Words*, p219.
- 9 *In Other Words*, p65.
- 10 *In Other Words*, p61.
- 11 「訳者あとがき」, 『わたしのいるところ』 p162-63。
- 12 “Afterwards,” *In Other Words*, p219.
- 13 solitude: the state of being alone, especially when you find this pleasant; exile: the state of being sent to live in an another country that is not your own, especially for political reasons or as a punishment; displace: to force people to move away from their home to another place. 『オックスフォード現代英英辞典』参照。
- 14 “Afterwards,” *In Other Words*, p219-21.
- 15 インタビュー “Conversations with Tyler: Jhumpa Lahiri on Writing, Translation, and Crossing Between Cultures.”

参考文献

- Bhaba, Homi. *The Location of Culture*. New York: Routledge, 1994.
- Canagarajah, Suresh. *Translingual Practice: Global Englishes and Cosmopolitan Relations*. New York: Routledge, 2013.
- Cash, Thomas F., and Thomas Pruzinsky, eds. *Body Image: A Handbook of Theory, Research, and Clinical Practice*. New York: Guilford Press, 2002.
- Chatterjee, Antara. “The Short Story in Articulating Diasporic Subjectivities in Jhumpa Lahiri.” Eds. Maggie Awadalla and Paul March-Russel. *The Postcolonial Short Story*. Palgrave Macmillan, 2013, pp. 96-110.
- Esterino, Adami. “Identity, Split-Self and Translingual Narrative in Jhumpa Lahiri.” *Comparative Studies in Modernism*. no. 11, Fall 2017, pp. 85-96.

- Holmes, Janet, and Nick Wilson, eds. *An Introduction to Sociolinguistics*. 5th ed., New York: Routledge, 2017.
- Farshid, Sima. "The Fertile 'Third Space' in Jhumpa Lahiri's Stories." *International Journal of Comparative Literature & Translation*. vol. 1, no. 3, October 2013, pp. 1-5.
- Katrack, Ketu H. *The Politics of the Female Body: Postcolonial Women Writers of the Third World*. New Brunswick: Rutgers UP, 2006.
- Lahiri, Jhumpa. *Dove Mi Trovo*. Milano: Guanda, 2018.
- . *In Other Words*. Translated by Ann Goldstein. London: Bloomsbury, 2016.
- . *Lowland*. New York: Vintage, 2013.
- . *Unaccustomed Earth*. Knopf, 2008.
- . *The Clothing of the Books*. Translated by Alberto Vourvoulias-Bush. New York: Vintage Books, 2016.
- . "Conversations with Tyler: Jhumpa Lahiri on Writing, Translation, and Crossing Between Cultures" *Medium*, January 11, 2017. <https://medium.com/conversations-with-tyler/jhumpa-lahiri-books-novels-in-other-words-6271de0ac8d9> Accessed 1 February, 2020.
- . "Jhumpa Lahiri Finds Freedom in Italian Memoir: 'No One Expected Me to Do It.'" *NPR*, February 8, 2016. <https://www.npr.org/2016/02/08/466001114/jhumpa-lahiri-finds-freedom-in-italian-memoir-no-one-expected-me-to-do-it> Accessed 1 February, 2019.
- . "'No Language Has Power Over Another': A PEN Ten Interview with Jhumpa Lahiri." *PEN America*, September 3, 2019. <https://pen.org/pen-ten-interview-jhumpa-lahiri/> Accessed 1 February, 2020.
- . "'It's a Silent Conversation': Authors and Translators on Their Unique Relationship" *The Guardian*, April 6, 2019. <https://www.theguardian.com/books/2019/apr/06/its-a-silent-conversation-authors-and-translators-on-their-unique-relationship> Accessed 1 February, 2020.
- . "'What Am I Trying to Leave Behind?' An Interview with Jhumpa Lahiri On Translation, Origin Stories, and Falling in Love with a Language" *Literary Hub*, August 31, 2017. <https://lithub.com/what-am-i-trying-to-leave-behind-an-interview-with-jhumpa-lahiri/> Accessed 1 February, 2020.
- Lauret, Marie. *Wanderwords: Language Migration in American Literature*. New York: Bloomsbury, 2014.

Lutzoni, Silvia. "Jhumpa Lahiri and the Grammar of a Multi-Layered Identity."

Journal of Intercultural Studies, vol. 38, no. 1, 2017, pp. 108-18.

Ty, Eleanor. *Unfastened: Globality and Asian North American Narratives*. U of Minnesota P, 2010.

小林惺『イタリア語文解読法』大学書林, 2001 年。

小林惺『イタリア語文法ハンドブック』白水社, 2006 年。

ジュンパ・ラヒリ『見知らぬ場所』小川高義訳, 新潮社, 2008 年。

——『べつの言葉で』中嶋浩郎訳, 新潮社, 2015 年。

——『わたしのいるところ』中嶋浩郎訳, 新潮社, 2019 年。

ホーンビ, A.S. 編『オックスフォード現代英英辞典』, オックスフォード大学出版会, 2005 年。

渡部あさみ「『見知らぬ場所』に生きる—Jhumpa Lahiri の短編作品における『新アメリカ人』の越境とグローバリティ」『人文論集』北海学園大学人文学部, 第 66 号, 2019 年, pp.49-79。

